

旅・発達 (一)



津 守 真

私は、しばしば、自分自身の青年期や、幼少年期に遡って身をおいて、そこから現在を見ているときがある。いろいろの人にきいてみると、多くの人が同じようなことをやっているらしい。ことごとによって、青年期に立ちもどることもあるし、また、幼児期の、非常にかすかなおぼろげな記憶の中に、それはもはや単なる記憶とはいえない、現在に通じている感覚を見ていることもある。ここで実例をあげるべきであるように思うが、どんな実例をあげても、それは単なる一例にすぎず、それを固定化して考えをすすめることになるとおそろいなので、敢て実例を記さないことにする。それほどに、人によって、いろいろの体験と記憶と、それを掘り起こす多様な現在の状況があるのだと思う。初心にかえるというのもその一種で、志を立てたときの素朴な感覚が、実

は、そのことの本質にふれていることを再発見するとき、人はもう一度新たな気持ちで、そのことに立ち向かうことができる。幼少期や青年期という、人間の成長期は、後になって、何度もそこに立ちかえて再出発する場所として、重要な意味をもっている。人間の発達を考えると、このことはぬかすことのできない重要な点であると私は思う。

こんなことをいろいろと考えているときに、私は、国際応用心理学会のシンポジウム「伝記および自伝の心理学」に参加することになった。午前九時から午後五時までにわたり、九名の人が研究報告を行って討議するという大きなシンポジウムであった。私は、かなり長期にわたる描画の縦断資料のコレクションをもっており、少しばかりそれについての研究報告もあり、このシンポジ

ウムのオーガナイザーであるデー・B・ハリス教授がそのことを知っておられたので、それについて報告するようにとお誘いを受けたのである。こういう表題のシンポジウムで、他の外国の研究者がどういうことを考えているのかわからないままに出かけたのであるが、終了したいま、このシンポジウムの意義も明瞭になり、おもしろいこともいろいろあったので、旅の感想とともに記してみようと思う。

長い間、この「幼児の教育」誌の編集事務をして下さっていた井上（寺井）直子さんの一家が、米国の西海岸のシアトルに住んでおられる。その井上さんご一家にヴァンクーヴァ（カナダの西端、米国との国境の都市）まで自動車ですべていただき、そこから飛行機で大陸を横断して、カナダの東部にあるモントリオールに着いたのは、午後十時だった。はじめての外国の都市に、夜遅く到着することに不安を感じていて、もっと早い時間に着く飛行機がないか調べたりしていたが、着いてみると、カナダの夏の夜の十時は、ようやく、太陽で沈んだばかりの時間である。暗くなつたばかりだと、まだ宵の口のような気分だから不思議である。三年前に米国に来たときに、夜、外出することは危険なことを見聞していたので、空港からタクシーに乗ると、私は運転手にその

ことをきいてみた。すると、耳もとに小型ラジオをくつつけるようにして野球放送をきいていた運転手は、即座に、モントリオールでは、町を歩いても危険なことはない。カナダの都市は、米国とは違うと、昂然と答えた。事実、夜十二時近くに、ダウンタウンの中央にあるホテルに着いたときには、通りに一ぱいに、多勢の人がぞろぞろと、ひきもきらずに歩いていった。それも、思い切ったファッションの服装をした男女が、夜中でも明るいショウウィンドウをのぞきながら、歩いている。ちょうど、東京の銀座と新宿を合わせたような賑やかさである。これは、私には全く思いがけないことだった。そのほかにも、思いがけないことにいくつも出会った。そのいくつかを拾ってみよう。

米国人は、カナダを米国の一部分のように見る傾向があるが、カナダの人は、米国とは違うことを強調するようである。モントリオールは、英語とフランス語と両方が話され、地下鉄も、商店も、学会の会議も、英、仏両語で注意書や掲示が記されている。フランス語圏の人は、モントリオールのことをモレアンと呼ぶ。この町は、三百年ほど前に、フランス人が移民してつくった町で、古い町は全くヨーロッパ風の建物と街並みである。新しい街の中央部も、半分はヨーロッパ風の建物で、重量感のある石の建造物や、窓ごとにバルコニーのついたアパートメントなどに混

って、近代的な高層建築が林立している。最近は、万博もあり、また、次期オリンピックがあるのです、街のいたるところで、新しい建物や道路を作るので、工事の機械の騒音のあることは、東京と似ている。国際学会は、近代的なホテルの二階を借りきって行われたが、プログラムのどこにも、開催場所のホテルの名前が書いてなくて、多勢の人がまごまごしたり、いくつもある特別講演の行われる部屋の記載がなかったり、登録の窓口が狭くて延々と列をつくって、一時間以上も登録に時間がかかったり、わからないうことがあって尋ねても、担当の係でないと全くわからず、横の連絡が悪く、組織の運営の悪さは、日本では考えられないほどである。よくいえば、のんびりしていて、神経が太い。

このように、外に出てみると、ふだん、日本の中だけにいたのでは、考えたこともなかった思いがけないことをいくつも経験する。中でも、今回の旅を通して考えさせられたことは、西洋では、自分と他人とは違っていることがあたりまえであるという大前提の上に立って社会生活ができているのに対して、「日本では、自分と他人とは違っていないのがあたりまえという大前提があるのではないか」ということであった。これは私の観察であるから、他の人は違ったようにみるかもしれない。しかし、私の観察として、敢てもう少し述べてみよう。

モントリオールはファッションの町であって、男も女も、好みの服装をして歩く。男性のおしゃれは特に目立ち、ジャケットやズボンも、われわれの目から見ると、奇想天外な色彩や仕立てである。どんな服装をしても、おかしいということはない。もちろん、日本人が、日本好みの灰色の服に、渋いネクタイをしていても、それがその人の好みならば、もちろん、それで通用する。しかし、もつと違う好みならば、それが平均とどんなに違っていようと、そのようにしてかまいはしない。人はそれぞれ違う好みと考えをもっているのだから、それに合うように自分が考えればよいのである。そう考えてみると、日本語には、みっともないとか、見苦しいとか、他人から見えてどう思われるかということであらわす語がいろいろある。しかし、それに相当する語は、英語にはないと思う。日本人のおしゃれは、他人から見えてすてきに見えるかどうかというおしゃれが多いのではないか。それに対して、西洋人のおしゃれは、自分がどのくらいすてきに思うかということが主たる評価の基準になっているのではないだろうか。もちろん、西洋人でも、自分が特別に着飾ったときには、他人に見てもらいたいと思うし、見せびらかす。また、ある種の会合に行くときには、そこにふさわしい服装であるかどうかを人にたずねることはある。けれども、それは、その会合が、勤め先からすく

に集まる会合であるとか、一度、家に帰って出直す余裕のある会合であるとか、その理由がはっきりしている。日常いつでも、他人の眼が自分の眼よりも優先するということはない。このことは、服装だけのことではない。考え方についてもそうであって、人が自分自身の考えをもち、他人とは違っていることはあたりまえのことである。どんなに違った考えをもつていても、それはその人の考えであって、違っているからいけないとか、おかしいというようには見ない。

西洋の社会は、違った考え、違った好みをもつ人々が集まっているという大前提の上に成り立っているので、違った人々の間に共通の点を見つけて、公共のものを作り上げてゆこうとする積極的な努力がなされる。とくに米国のように、歴史の浅い国では、集まった人々がよいと考えれば、どんなことでも、作る事ができる。いままで前例のないことでも、皆がよいと思うならば、実行するのである。米国で、新しい教育方式が早くにとりいれられて普及するのは、こういう考え方が一般に地盤にあるからといえるであろう。日本とはおよそ違ったこのような風土の成立については、最近翻訳されつつある、ローラ・インゴルス・ワイルダーの本、「大きな森の小さな家」「プラムクリークのほとり」で「シルバレーイクの岸辺で」「長い冬」「大草原の小さな家」(福音館)

などの中に開拓者の家庭に生まれ育った一人の少女の眼を通して描かれている。米国の教育が知的教育に傾いても、教室での教育の実際は、画一教育になることなく、ひとりひとりの子どもが尊重されるのは、こういう地盤があるからだと思う。

これに対して、日本人の考え方の前提には、自分は他人と同じであるという考え、あるいは、同じ仲間属するという考えがあるように思う。服装もそうであるし、考え方もそうである。自分が大多数と違っていることを恥しいと思ったり、他人が大多数と違っていると、いけないことだと思ったりする。このことは教育面にも同様であって、皆一緒に体操をしたり、整列をしたりすることが重んぜられ、それから外れる子どもは、問題視される。

日本人の考え方には、人間の共通性を見ることが出来る精神的地盤がある。以心伝心というような、ことばを並べなくとも、相手に通じることが出来ることを多くの日本人は知っている。それは、小さな島国の中で、長い年月、共通の風土の中で育ってきたためかもしれない。精神の深層における共通性に目をとめるならば、おそらく、人間には共通な経験があるのだと思う。しかし、それが社会生活の表層において求められると、個を無視することになってしまふ。公共のものを作り上げるためには、まず他人とは違う自分、自分とは違う他人が当然のこととして認められねば

ならぬ。このことは、権力をもつ者や、主流といわれるものに依存しなければ生きてゆくことのできない社会においては、非常にむづかしいことである。そこでは人は、自分を、権力や主流の側と同一視することになるか、あるいは、それに反逆する者として自分を見ることになる。自分を他人とは違った存在として見るということは、これとは全く違った地平に立つことなのである。それには社会に目を向ける前に、社会を超えた絶対者に対して自分をおいて見ることがなければならぬ。これは、日本人の精神文化が、これからかちとらなければならない課題であると思う。そして、互いに違った人間が、公共のものを作り上げる努力が、いろいろなところで、長い間かかって、なされなければならないのだと思う。

シアトルで、日本の商社の駐在員をしておられるI氏に、私は、白人を従業員として雇ってみて、日本人と違うことを感じられますかとたずねてみた。I氏は、直ちに、非常に違うと答えられた。白人は、八時から始業という、八時きっかりに来て仕事を与えられるのを待っているが、四時に終業になると、たとえ帳簿のつけかけでも、帳面を閉じて帰り支度をするという。日本の本社からは、もっと能率よく働かせろといってくるが、残業してまで働くという観念は彼らにはないし、その間に挟まって、一

番苦労しますねということであった。彼らは家に帰って何をするかといえば、特別に趣味があるわけでもなく、芝生を刈ったり、家の前に椅子を持出して腰かけて、ただぼんやりしていたり、その家を訪問したりして過ごすのである。そういえば、モントリオールでも、バルコニーや階段に腰を下して通りを眺めている人の姿は、いつも目についた。そしてI氏は、「白人は日本人みたいに、すぐ怒ったり、いらいらしたりしないんです。ゆったりしてるんですね、時間の単位が長いんです」といわれた。日本人の会社員の生活は、会社の仕事が全部である。彼らは、自分の生活が主で、会社の仕事は、その中の一部なのである。私は、I氏の観察は、よく当たっていると思った。

日本人が、日本であたりまえと思っていることは、世界の舞台に出してみるときに、あたりまえではなくなる。日本語で通じ合うことのできるのは、世界中で小さな日本列島の中だけである。そのことを忘れると、また、いつの間にか、世界から孤立しかねない。それでは、日本人が外国に行けばよいのかといえば、そんなことですむ問題ではない。それは社会の相異をこえて、人間に共通な心の真実を育て、それが通用するような社会をつくり上げてゆくことだと思ふ。簡単にいいすぎたきらいがあるが、それが、われわれの身のまわりの教育の課題でもあり、われわれの社

会の課題でもある。それがいかに現実にはできない者であり、拙劣な者であるかを痛感しながらも、やはり、このことが、教育の重要な課題であると私は思う。

さて、発達についてのシンポジウム「伝記と自伝の心理学」の中で論ぜられたことを少しく紹介しようと思つて書き始めたが、その序論で時間を費してしまつた。しかし、このことは、発達の問題と無関係ではないと私は思つている。人間の発達の問題は、広くいえば、こういう、歴史、文化、社会のことをふくんだことからであり、西洋の最新の知識を移入するというだけではすまないものを、その問題自身の中にもつてゐるからである。

このシンポジウムのオーガナイザーであるハリス教授は、米国のペンシルヴァニア州立大学の心理学科の主任教授であり、発達心理学を専門とする学者であるが、開会に当たつて、次のような主旨のことをのべられた。

以前には、人間のパーソナリティの研究は、もつぱら哲学者の仕事であり、後には文学者の仕事となつた。ブルタークの「生涯」は実際の人間の記述の最初の試みとして、心理学的研究ともいえるであろう。今日の心理学者にとっては、伝記や自伝はどのような

な役を果しているであろうか。手紙や、日記、自伝などは、心理学者にとって役に立つであろうか。以前に、ゴルトン・オールポートは、このような資料を心理学の研究の材料として手がけたことがあるが、その後、ごく僅かの心理学者がそれを継続したにすぎず、心理学の関心は、実験や測定の方に移つてしまつた。臨床心理学の人々が、人間の主観的な材料を扱わざるを得なかつたが、実証的方法との間に生ずる論議は十分になされないうままでいゝ。今日、心理学における厳密な実証主義は、排斥されるところまではいかないまでも、心理学は主観的側面に対してしだいに目を向けるようになってきている。発達心理学者は、縦断的な資料に関心をもつが、ひとたび個人の発達に目を向けると、個性の独自性に魅せられ、それを科学的に操作することが大へん困難であるにもかかわらず、それは心理学の方法論を考える上にも、また人間の行動の科学的研究を、人間のものとして行うのにも、重要なものと考えようになつてきている。今回、このような伝記及び自伝の研究のシンポジウムを企画することができるかどうか、その可能性を検討したとき、直ちに、同じ方向の関心をもつ心理学者の名前が次々にあがり、遂に、このような大シンポジウムの計画にまで発展したのである。大たい、以上のような主旨の冒頭演述があつて、各研究者の報告に入った。

(つづく)